●征くシリーズ●取材・執筆・写真／本誌編集部

# 鉄道界の大聖堂

# 聖（セント）パンクラス駅を征く

**2007年11月14日、午前11時１分。**
**９年の歳月と58億ポンドをかけ、ロンドンの新しい国際駅に生まれ変わった**
**セント・パンクラス駅のプラットホームからユーロスター第１便が静かに滑り出た。**
**その記念すべき日から1年余り。**
**様々なレストランや各種ショップをそろえた複合施設として、**
**ユーロスターの乗客はもとより、多くの人々でにぎわう。**
**今号では、このセント・パンクラス駅を征くことにしたい。**

© Michael Walter/Troika/LCR

## 曲がったことが大嫌いな聖人の駅

東京には「東京駅」があるが、ご存知のとおり、ロンドンには「ロンドン駅」や「中央駅」というものが存在しない。

十九世紀、英国では数多くの私鉄がサービスを開始し、大手の鉄道会社は、人目をひくターミナル（終着駅）を競って建てた。しかし、全国の鉄道が国有化されたのは一九四七年になってからと遅く、どの私鉄も「ロンドン」や「中央」といった名前を駅名につけることができないまま名称が定着、今日に至っている。

南イングランド方面への列車はヴィクトリア駅から、西方面への列車はパディントン駅から、エジンバラなど英国北部の都市へ東海岸寄りの縦断ルートで向かう列車はキングズ・クロス駅からといった具合に行き先によってターミナル駅が異なるのも、この歴史的事情による。

セント・パンクラス駅も、この「私鉄・百花繚乱時代」に生まれた駅のひとつだ。

「パンクラス」は、日本人にはあまりなじみのない聖人の名前だが、紀元三〇四年に十四歳の若さで殉教したローマ人の少年という。その頃、ローマ帝国ではキリスト教徒迫害が大々的に行われていた。時のローマ皇帝ディオクレティアヌスの前に引き出されたパンクラスは、キリスト教の棄教を迫られたが断固として拒否。その意志の強さに驚嘆した皇帝に、改宗すれば富と権力を約束してやるとまで言わしめたものの、頑なに拒み続け、ついには首をはねられてしまったとされている。パンクラスが、束縛する者、偽証する者に対して抗議する守護聖人であり（そしてなぜか頭痛に対しても効力があるとのこと）、子供の守護聖人であるのは、この殉教時のエピソードをうけてのことだろう。

埋葬後、遺骨の一部はイングランドに持ち込まれたと伝えられており、イングランドにも「セント・パンクラス」と名付けられた教会が複数ある。

一八六八年のセント・パンクラス駅完成にさきだち、誰がこの聖人の名を提案したのかは定かではないものの、締め付けや偽りに対し、決して与（く）みしない不屈の精神が宿るようにという願いがこめられていることは間違いなさそうだ。

完成後、「英国鉄道界の大聖堂」という異名をとるが、それはユーストン・ロードに面してそびえたつ、同駅の玄関口、旧ミッドランド・グランド・ホテルの外観の美しさ、あるいは当時の建築技術の粋を集めた駅構内の見事さに対してのみ与えられた賛辞だったとは思えない。本稿執筆にあたり何度か足を運んだが、この駅には「大聖堂」と呼ぶに値する「何か」がある。それはこの駅に満ちている、気高さ、潔さ、力強さといった「聖人パンクラス」の名にふさわしい独特の空気であるともいえ、同駅は、ウォータールー駅に代わって、大陸（ヨーロッパ）からの客人たちを迎えるホスト役を日々、堂々と務めあげている。

## ライバル駅は隣のキングズ・クロス

ユーロスターのフランス側のメイン・ターミナルである、パリ北駅も一見に値する。が、（ロンドン在住者だからひいき目に見ているというわけではなく）訪れる者に与える印象の強さにおいては、セント・パンクラス駅に軍配を挙げたい。

なぜ、目にした時のインパクトが強いのか。

他の駅とは異なる、しかも秀でている点がきわだっているからではないだろうか。

十九世紀半ば、その規模においても、また、華やかさや美しさといった見た目においても、他の駅に負けない駅を築き上げるという一大プロジェクトが計画され、それに携わり、成功の鍵を握ったのは二人の偉大なるイングランド人だった。

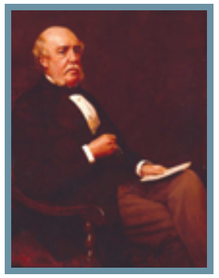
ひとりは、ヴィクトリア朝時代を代表するエンジニア、ウィリアム・ヘンリー・バーロウ（William Henry Barlow 一八一二―一九〇二）。そしてもうひとりは、ハイド・パークのアルバート・メモリアルなどの設計でも知られる、ジョージ・ギルバート・スコット（George Gilbert Scott 一八一一―七八）である。

バーロウは、「ヴィクトリア時代の驚異」とさえ言われた、セント・パンクラス駅そのものを、スコットは同駅の玄関口にあたるミッドランド・グランド・ホテルを設計した。

二人に大仕事を依頼したのは、ミッドランド・レールウェイ社（Midland Railway Company）。名前の通り、ミッドランドとロンドンを結ぶ路線を運行していた同社は、グレート・ノーザン・レールウェイ社が一八五二年に完成させたキングズ・クロス駅をターミナルとして借り、ミッドランドのバートン・オン・トレントという英国随一のビール産地から大量のエール（ラガーより苦味のある英国独特のビール。「Bass」などが有名）をロンドンに運び込んでいた。産業革命直後のロンドンは労働者であふれかえっており、彼らの喉を潤し憂さを晴らすため、膨大な量のエールが必要とされていたのだ。

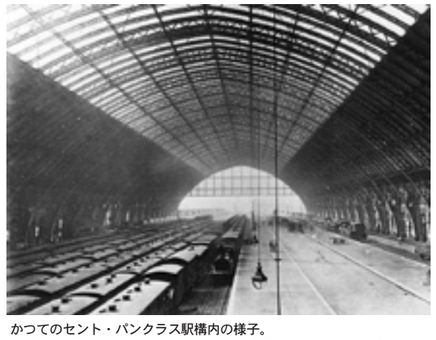
ミッドランド・レールウェイ社はやがて、自社の列車専用の「ビール駅」建設にならぬ「ビール御殿」乗り出す。

キングズ・クロス駅をしのぐ駅を目指した結果、キングズ・クロス駅を見下ろすように高い位置にプラットホームを備え（理由については次頁参照）、七十四メートルという距離にわたって、支柱が一本も建っていない、当時では世界一



19世紀の英国で、工学技術界の重鎮として複数の大プロジェクトを手がけたウィリアム・バーロウ＝左の肖像画。先輩にあたる偉大なエンジニア、イサムバード・キングダム・ブルネル（Isambard Kingdom Brunel）の後を引き継ぎ、ブリストル郊外のクリフトン・サスペンション・ブリッジ（Clifton Suspension Bridge）＝上写真＝の完成に尽力したことでも知られる。

改修の進む、旧ミッドランド・グランド・ホテル部分をキングズ・クロス駅から臨んだところ。マリオット系列のホテルとして、2010年（2011年にずれこむ可能性ありとのこと）のリニューアル・オープンを目指す。



かつてのセント・パンクラス駅構内の様子。
大規模な「バーロウ・シェッド」は人々を感嘆させた。（© HighSpeed1）


週刊ジャーニーでは、
皆さまからの投書をお待ちしております。

（週刊ジャーニーを読んでのご意見・ご感想、英国でのおもしろ学校体験、大好きなテレビ番組や芸能人の話などなど、お気軽にお寄せください。）

あて先
WEEKLY JOURNEY
JAPAN JOURNALS LTD
7-8 MARKET PLACE
LONDON W1W 8AG
E-MAIL:
info@japanjournals.com

の「シングル・スパン」（※1）の「シェッド」（※2）を有するセント・パンクラス駅が一八六八年にできあがった。ちなみに、シングル・スパンの建造物としては世界一の規模という栄誉の座は、それから二十年間、脅かされることはなかった。

また、ホームと線路の下には広大な「アンダークロフト」（undercroft＝倉庫）が用意され、最高で二千八百万パイント分のビールを収納することが可能だった。

さらにその四年後、コンペで選ばれたスコットの設計図をもとに建てられた、明るい赤茶のレンガ造りの外壁がひときわ目立つミッドランド・グランド・ホテルが落成式を迎える。二百五十の客室を擁したこのホテルは、大英帝国の中でもことさら贅沢なホテルと評されたという。十九世紀後半、セント・パンクラス駅を抱える、ミッドランド・レールウェイ社は得意の絶頂にあったのだ。

※1　single-span＝途中に支柱がない造り
※2　shed＝ホーム、線路などすべてを覆う屋根つきの空間

「Sir」の称号も与えられた、ジョージ・スコット。ヴィクトリア女王の亡夫、アルバート公を記念してハイド・パークに建てられたアルバート・メモリアルをはじめ、50 以上の建造物の新規設計、修復作業に携わった。ただ、本人は、最も成功したプロジェクトとしてセント・パンクラス駅のミッドランド・グランド・ホテル＝当時の写真（© HighSpeed1）＝を挙げたとされる。

◀セント・パンクラス駅の航空写真。すぐ右手にはキングズ・クロス駅が見える。（© HighSpeed1）

▼セント・パンクラス駅は、キングズ・クロス駅を見下ろすように、ホテルもプラットホームも「高台」（実際には地下倉庫）の上に築かれたことが、この階段＝左下写真＝を見るとよく分かる。セント・パンクラス駅のすぐ北にリージェント運河が横たわっており、線路をどう通すか、様々な方法が検討された。最終的に、プラットホームを高い位置に置き、線路をゆるやかな坂状にして運河の上を越えさせる方法がとられたのだが、「高台」に駅を築くことにより、技術面での問題がクリアされただけでなく、プライドも満たされ、まさに一石二鳥の結果となった。

## 二度よみがえったターミナル

しかし、栄華は久しく続かないというのは古今東西共通のことわり。

きらびやかな栄光の日々を味わったセント・パンクラス駅ながら、鉄道駅として使用されなくなるという屈辱を味わう。全鉄道路線の国有化をめざす政府が一九二一年に鉄道法を施行、百二十もひしめいていた私鉄会社の統合を次々と強制的に進める中で、ミッドランド・レールウェイ社が、ロンドン・ミッドランド・アンド・スコティッシュ・レールウェイ社に吸収された結果、ユーストン駅にターミナルの役割を奪われてしまったのだった。セント・パンクラス駅は、一九三五年からはオフィスとして利用されるようになり、やがて、さらなる悪い知らせが届く。

第二次世界大戦後、政府念願の鉄道国有化が実現し、セント・パンクラス駅の所有権も英国国鉄に移ったが、国鉄は財政が逼迫しており、それにつけこむように、この駅をつぶしてプールを造りたいといった申し出が相次いだ。誘惑に負け、と呼ばれる組織を発足させた。資本主義経済の名のもとに、切り捨てられ、永遠に失われようとしていた、老朽化の進む歴史的建築物の保護を積極的に推進。同組織が勝ち得た、もっとも名高い勝利は、セント・パンクラス駅を取り壊しの危機から救ったことだろう。現在、同駅は、ウィンザー城などと同クラスの「グレードⅠ」の歴史的建造物として登録されており、半永久的に保護することが義務付けられている。

死の淵からよみがえったといっても過言ではないセント・パンクラス駅だったが、八十年代、九十年代は再び不遇の時代を経験する。複数のマイナー路線の発着駅としては使われたものの、かつての面影はなかった。

そんなセント・パンクラス駅に、思わぬところからスポットライトがあたることになる。サッチャー政権時代の一九九四年にユーロスターが開業。当初はウォータールー駅発着だったものの、ロンドン南東部からトンネルを通し、ゆくゆくはキングズ・クロス駅の地下にターミナルを移すことが考えられていたという。

しかし、これに異議を唱える人物が登場した。ロンドン東部の再開発に関して並々ならぬ情熱を燃やしていた、当時のマイケル・ヘーゼルタイン副首相だ。トンネルはロンドン東部から掘られることになり、ルートの再検討がなされた。ここでセント・パンクラス駅の再利用案が急浮上する。

ベッチャマンによってよみがえったセント・パンクラス駅が、再び栄光を取り戻すチャンスを与えられた瞬間だった。

セント・パンクラス駅を見捨てようとした国鉄に対し、一九六〇年代、強力な反対キャンペーンを展開したのが、後に桂冠詩人となったジョン・ベッチャマン（John Betjeman 一九〇六―八四）である。

既に詩人として高い評価を得るに至っていたベッチャマンは、一九五八年、他の創設メンバーとともに「ヴィクトリアン・ソサエティ」を発足させた。資本主義の名のもとに、切り捨てられ、永遠に失われようとしていた、老朽化の進む歴史的建築物の保護を積極的に推進。同組織が勝ち得た、もっとも名高い勝利は、セント・パンクラス駅を取り壊しの危機から救ったことだろう。現在、同駅は、ウィンザー城などと同クラスの「グレードⅠ」の歴史的建造物として登録されており、半永久的に保護することが義務付けられている。

死の淵からよみがえったといっても過言ではないセント・パンクラス駅だったが、八十年代、九十年代は再び不遇の時代を経験する。複数のマイナー路線の発着駅としては使われたものの、かつての面影はなかった。

そんなセント・パンクラス駅に、思わぬところからスポットライトがあたることになる。サッチャー政権時代の一九九四年にユーロスターが開業。当初はウォータールー駅発着だったものの、ロンドン南東部からトンネルを通し、ゆくゆくはキングズ・クロス駅の地下にターミナルを移すことが考えられていたという。

## 新ライバル駅はNYのグランド・セントラル!?

貧困層が他地域より多いとされる、ロンドン東部の活性化を目指し、二〇一二年オリンピックの誘致運動が繰り広げられるかたわらで、資金難などに悩まされ、紆余曲折を経ながらも、セント・パンクラス駅を新国際ターミナルに生まれ変わらせるべく、巨大プロジェクトが進められた。

プロジェクト名は「ハイ・スピード・ワン（High Speed 1）」。

最終的に、ロンドン東部のダゲナム（Dagenham）から、オリンピック会場予定地のストラットフォード（Stratford）経由で、長さ二十キロに渡るトンネルが通され、ヨーロッパとセント・パンクラス駅がつながった。五十八億ポンドという巨額の税金と、九年間という時間、そして携わったすべての人々の汗が結実し、ロンドン～パリ間が二時間十五分（従来の所要時間より二十分短縮）で結ばれるようになったのだった。

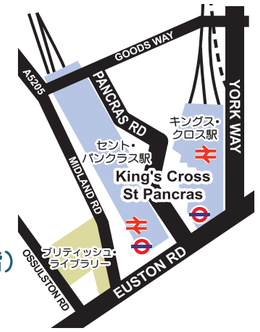
こうして、二〇〇七年十一月から、本格的に新国際ターミナルとして機能し始めたセント・パンクラス駅だが、目指す姿は単なる「ユーロスター発着駅」ではない。ユーロスターを利用するしないにかかわらず、ショッピングや食事など様々な目的で多くの人々がこの場所を訪れるようにと、店舗の充実に力を入れている。

フロアは、プラットホーム・レベルと、アンダークロフト・レベルに分かれており（大まかな見取り図は下図参照）、レストラン「ザ・グランド」や、シャンパン・バーなどのあるプラットホーム・レベルはファースト・フロアにあたり、ショップ、カフェなどがずらりと並ぶアンダークロフト・レベルは地上階にある。駅に出店するのはこれが初めてという、老舗書店の「フォイルズ」や、大手のおもちゃ屋である「ハムレーズ」などの名前もアンダークロフト・レベルの店舗リストに見られる。

ニューヨークの玄関口といえる、グランド・セントラル駅のように、駅自体が観光スポットとなり、ショッピング・モールとなり、レストラン街となることが、現在のセント・パンクラス駅の目標といえる。また、二〇一二年のロンドン・オリンピック開催時には、ストラットフォードの会場まで、わずか六分半で観客を運ぶ高速列車の発着駅として、その役割がいっそう拡大される。

明治維新と同じ年に完成してから、今年で百四十一年。気品あるあでやかさと、威厳ある風格を同時にたたえたユニークな駅として異彩を放ち続けるセント・パンクラス駅。ユーロスターから降りてくる人々の異国の言葉に耳を傾けながら、そぞろ歩きにショッピング、あるいはランチや夕食を楽しむために、一度出かけてみることをお薦めしたい。

「グレードⅠ」に指定されている建造物だけに、修復時の要求は厳しく、高度なレベルの作業が求められた。また、上の写真に見られる、美しい水色は「バーロウ・ブルー」と呼ばれる。往時の様子を再現するために、2 万リットルの同色のペンキが使われた。




## パリ / リール ユーロ・ディズニー ブリュッセルへ

セント・パンクラス駅は、ヨーロッパへの玄関口といえる。飛行機と異なり、出発時間の 30 分前にチェックインすればＯＫという気軽さもユーロスターのうれしいポイント。パリ往復（1 日に 17 往復）で 59 ポンド（スタンダード･クラス）と、お得なチケットもある。ご予約はオンライン、または下記電話番号でどうぞ。

**www.eurostar.com**
**08705 186 186**

Special thanks to: Eurostar / London & Continental Railways (LCR)

## セント・パンクラス国際ターミナル構内フロア・プラン

およそ 70 のショップ、カフェ、レストランがある。紙面の都合ですべてをご紹介することはできないため、ここでは目印になりそうなものを選んで記載。
※情報はすべて 2009 年 2 月 10 日現在のもの

### プラットホーム・レベル

Ⓐ **Betjeman's gastro pub**
ベッチャマン・ガストロ・パブ
Ⓑ **The Meeting Place**
恋人同士が抱き合っているところを表現した巨大な像＝写真。アーティストの Paul Day 作
Ⓒ **Carluccio's**
カルーチオ（イタリア料理）
Ⓓ **Betjeman's Statue**
ベッチャマンの像
Ⓔ **St Pancras Grand**
レストラン、ブラッセリー、バー
Ⓕ **WH Smith**
Ⓖ **Champagne Bar**
シャンパン・バー

### アンダークロフト・レベル

① **Eurostar Ticket Office & Travel Centre**
オンラインで購入したチケットのピックアップもここでできる
② **Lift**
アンダークロフト・レベルとプラットホーム・レベルをつなぐ（以下、③、④、⑤も同様）
③ **Stairs**
④＆⑤ **Escalators**

### ARCADE

※目印になりそうなもののみ記載
※一部のカフェは、朝 6 時から営業

⑥ **Costa Coffee**
⑦ **Foyles**
⑧ **Hamleys**
⑨ **WH Smith**
⑩ **Bureau de Change (ICE)**
⑪ **M&S Simply Food**
⑫ **Paul**
⑬ **Benugo**

### EUROSTAR LOUNGE

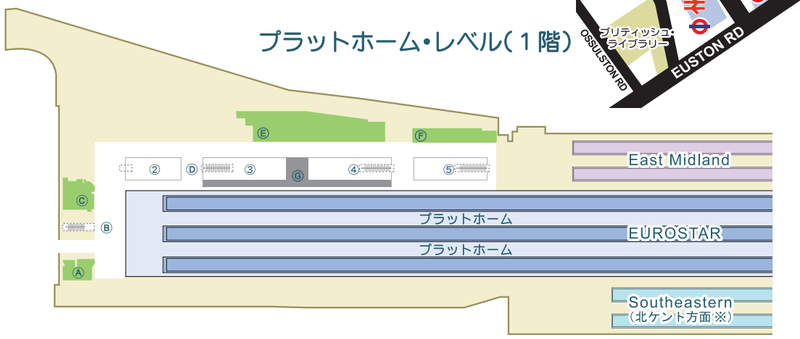
※次の 3 店舗はユーロスターにチェックインした後にのみ利用できるもの。
※ラウンジにはこの 3 店舗しかないため、どれも込み合っていることが多い。特に朝 7 時、8 時台のユーロスターに乗る場合、カフェ・ネロの列が異常に長いことがあり、ただコーヒーを買うためだけにでも 30 分かかることもあるので要注意。アーケード内のカフェにも早朝からあいている店があるので、それらを利用するのも一案。

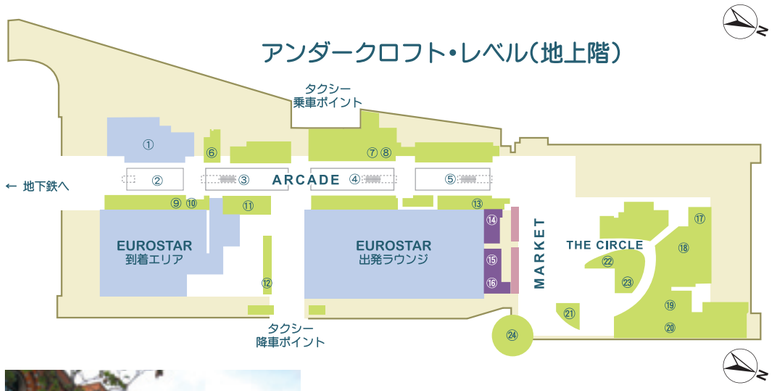
⑭ **Est**
⑮ **WH Smith**
⑯ **Caffe Nero**

### THE CIRCLE

※目印になりそうなもののみ記載

⑰ **Left Luggage**　荷物預かり所
⑱ **Boots**
⑲ **WH Smith**
⑳ **Marks and Spencer**
㉑ **Starbucks**
㉒ **Paul**
㉓ **Yo! Sushi**
㉔ **Main Entrance**
2010 年より、地下鉄駅からの連絡通路はここにつながる予定



▲車両数の多いユーロスターの発着に対応できるよう、増築された部分へのエントランスのひとつ。
▶ユーロスターのプラットホームの下は、ショップやカフェなどが軒を連ねる。写真に見える白い柱は、かつてのアンダークロフト（地下倉庫）にあった支柱を補強したもの。その間隔は、ビール樽ちょうど 3 つ分で、ここに何千というビール樽が保管されていた時代をしのばせる。

セント・パンクラス駅構内のシンボル的存在といえる、デント（Dent）社の大時計。オリジナル＝上のモノクロ写真（© HighSpeed1）＝は、英国鉄が米国人富豪に売却しようとしたが、取り外し作業中に落として壊してしまったという。粉々に壊れたものの、そのころ駅職員として働いていたローランド・ホガード氏（現在 91 歳）が 2000 もの破片をすべて引き取ってつなぎあわせ、見事に復刻させた＝写真左。（© Michael Walter/Troika/LCR）

1969 年には「Sir」となり、1972 年に桂冠詩人という、英国の詩人に与えられる最高の称号を得たジョン・ベッチャマン。テレビ番組にも多数出演し、名所旧跡をめぐる紀行シリーズなどで人気を博したほか、詩人としてだけでなく幅広く活躍。当時の英国を代表する「名士」となったが、オックスフォード大学を卒業できなかったことを生涯悔やんでいたという。1974 年には、同大から「名誉博士号」の学位を贈られた。

プラットホーム・レベルで楽しむ

# 英国料理の正統派レストランと常に80種以上を揃えるシャンパン・バー

英国では、コベント・ガーデンのロイヤル・オペラ・ハウスに加え、トラファルガー・スクエアそばのナショナル・ポートレート・ギャラリーなどでレストラン業務を展開する、「Searcys」（スィアスィーズ）は、フランス系外食産業グループ。セント・パンクラス駅のメイン・レストランといえる「グランド」と、ユーロスターのプラットホームと並行してテーブルが並ぶ「シャンパン・バー」は、ともにその「Searcys」グループが仕掛け人だ。

## St Pancras Grand

**セント・パンクラス・グランド**

メニューは、あえて英国料理にこだわったラインアップだが、盛り付けはモダンでおしゃれ。ユーロスター利用客以外の来店も多いという。3コース18.47ポンド（1847は「Searcys」の創業年）というお得なセット・メニューもあり。また、時間があまりない時には、早くサーブされるメニューはどれか、店のスタッフに相談すると良い。

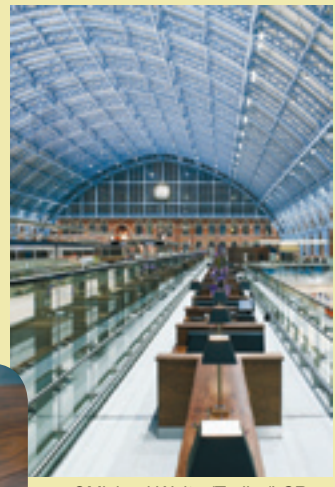
毎日 7:00am ～ 10:00pm オープン
※時間帯によって、朝食メニュー、アフタヌーン・ティーなども注文できる。
Tel: 020 7870 9900
www.searcystpancras.co.uk

グランドの店内。シンプルな中にも居心地の良さを感じさせるのは、照明などにベル・エポックの、どこか懐かしいデザインが採用されているからだろうか。静かで、駅独特のあわただしさとは無縁の空間。しぶめの金色の天井がゴージャスさを加え、大きな時計が、駅構内にいることを思い出させてくれる。
© Michael Walter/Troika/LCR

## The Champagne Bar

**シャンパン・バー**

停車中のユーロスターを真横に見ながら談笑できるバー。スタッグ・ナイトやヘン・ナイト（結婚直前に、男友達だけ、あるいは女友達だけで開くパーティー）のためにヨーロッパへ出かけるグループが気前よくシャンパン・ボトルを開ける姿も見られる。



©Michael Walter/Troika/LCR

足元のスイッチを押せば、温風が吹き出る仕組みになっているイス。温風は、15分たつと自動的に止まるようになっている。

マッシュルームの上に、ポーチトエッグとハドック（タラ）のほぐし身が盛られたスターター。

マッシュトポテトの上にブラック・プディング（血入りソーセージ）、ホタテ、ロケットが上品に積まれたスターター。ウスターソースがベースと思われるソースは、かなりスパイシーで意外性あり。

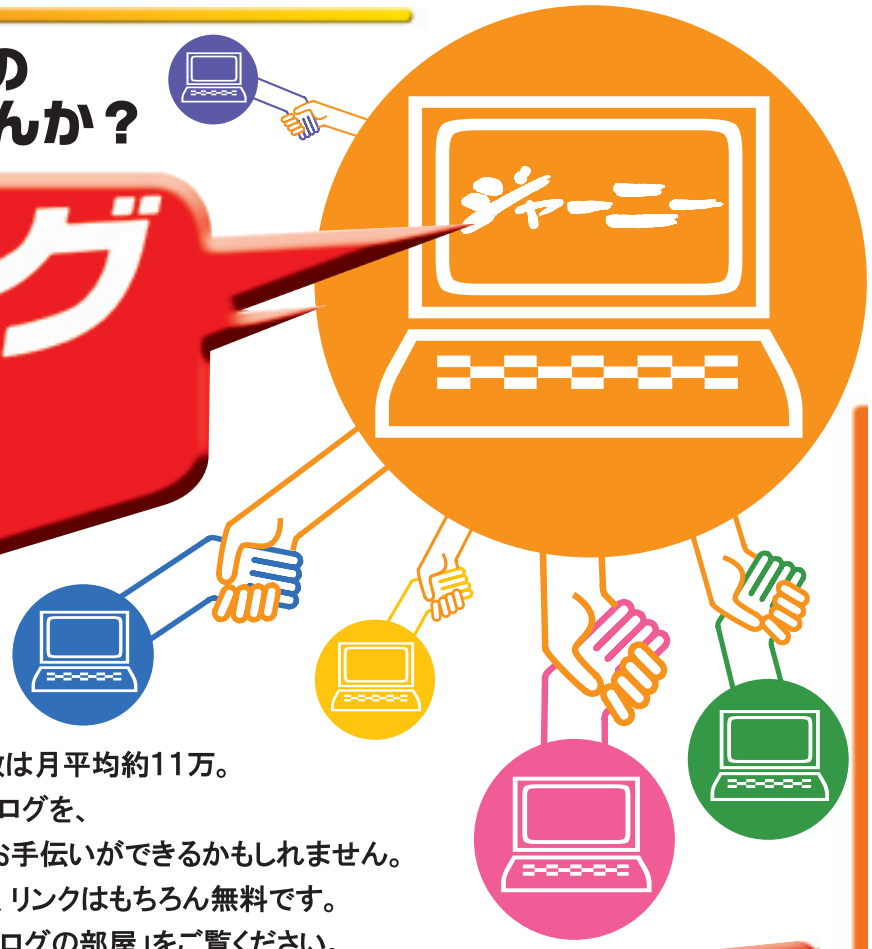
メインのスロー・ローストしたブタばら肉。風味付けに用いられているマーマレードのほのかな苦味が良いアクセントになっていた。

デザートに注文した季節の果物のプディング。甘さは控え目。

出発前にシャンパンで乾杯、としゃれこんでみては？


あなたのブログをジャーニーのホームページにリンクしませんか？

個人ブログ大募集!!




現在、インターネット・ジャーニーへのアクセス数は月平均約11万。
あなたが発信している英国での生活に関するブログを、
今よりちょっぴり多くの方にご覧いただくためのお手伝いができるかもしれません。
営利を目的としていない個人のブログであれば、リンクはもちろん無料です。
お申し込みはインターネット・ジャーニー「個人ブログの部屋」をご覧ください。

※掲載にあたり、事前に一定の審査をさせていただきます。内容によってはリンクをお断りしなければならない場合もございます。予めご了承ください。

インターネット・ジャーニー

www.japanjournals.com